

企業名： 信越化学工業

レポート名： 統合報告書 2024 についての考察

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

理解できる。主に以下の3点が挙げられる。

①この会社が目指している将来の姿

17 ページ目に記載されている通り、「地球の未来への貢献」が目指されている。具体的には以下の5項目が挙げられており、同社が生産している化学材料がどのような製品を生み出し、どのように地球の未来へ貢献するのかが示されている。

・デジタル化

AI・IoT・5G・メタバース。

半導体シリコン・光ファイバー用プリフォーム・低誘電樹脂などによって実現する。

・スマートインフラ

インフラ整備。塩化ビニル樹脂・セルロース誘導体・シリコーンによって実現する。

・効率性の向上

ロボット・産業用モータ。

半導体シリコン・レアアースマグネット・シリコーンなどによって実現する。

・健康増進

医薬材料・医療器具機器材料：

セルロース誘導体・ポパール・シリコーン・レアアースマグネットにより実現。

食品・衛生：

合成性フェロモン・セルロース誘導体・光触媒により実現。

・環境貢献

電気自動車：

レアアースマグネット・リチウムイオン電池用負極材・シリコーンなど。

省エネ家電・再生可能エネルギー：

レアアースマグネット・半導体シリコン・シリコーン・LED用パッケージ材料など。

②塩化ビニル樹脂と半導体の安定的な成長

同社の主力製品である塩化ビニル樹脂（以下、塩ビ）と半導体については、需要の増加と市場の拡大を着実に捉え、安定的な成長を目指すと述べられている。

まず塩ビについては、世界における需要の推移が示されている。塩ビは耐久性、耐腐食性、加工性に加え、防炎性、火災安全性にも優れた素材であり、その需要はインフラや住宅投資等との関わりが強く、世界経済の成長率と一定の相関を有すると述べている。今後も米国に加え、アジアやアフリカを中心に安定的な成長が見込まれるとのことである。

次に半導体について、世界市場は2030年までに約9,100億ドルまで拡大すると予測されている。この理由として、半導体は生成AIが生産性工場の新たなツールとして注目を集め、また自動車、スマートシティやスマートファクトリー向けにも需要が拡大していることが挙げられている。

③株主へのさらなる還元

11ページ目によると、過去10年の配当性向は31%であったが、株主への感謝の気持ちの表れとして、今後は配当性向の目安を40%まで引き上げるといふ。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

理解できる。この会社の現在の競争優位性は「産業や生活の基盤となる多くの素材で高いシェアを誇ること」であると考えられる。同社はコアテクノロジーをもとに4つの事業において世界1・2位のシェアを獲得しており、それぞれの競争優位性も示されている。

・生活環境基盤材料事業

インフラから、住宅・農業・生活用品まで日々の生活に欠かせない塩ビにおいてはシェア世界1位を獲得している。競争優位性は以下の通りである。

- ・世界最大の生産能力で効率の良い生産を行っていること
- ・安定した品質と世界中への安定供給を行っていること
- ・米国での有利な原料事情とエネルギー調達の安定性
- ・原料（エチレン）からの一貫生産体制の構築
- ・世界3拠点・米国3か所の複数拠点での生産、グローバルな販売ネットワーク

・電子材料事業

半導体シリコン（シリコンウエハー）・合成石英では世界シェア1位を、フォトレジスト・フォトマスクブランクスでは世界シェア2位を誇る。競争優位性は以下の3つの観点から述べられている。

①事業全体

- ・安定した品質と安定供給
- ・高度化する技術要請への対応

②半導体関連製品

- ・豊富なラインナップによる、開発優位性・提案力のシナジー効果

③レアアースマグネット

- ・複数拠点化による安定供給ならびに原料からの一貫生産体制の構築
- ・重希土類の大幅削減製品の展開と、リサイクルの推進

・機能材料事業

用途が多岐にわたるセルロース誘導体をはじめ、合成性フェロモンなど、より良い機能を実現する多彩な製品し、シリコンでは国内シェア 1 位を、防虫用合成性フェロモンでは世界シェア 1 位を、セルロース誘導体（メチルセルロース）では世界シェア 2 位を獲得している。競争優位性については3つの観点から述べられている。

①事業全体

- ・技術力を活かした、各種高付加価値製品の開発力
- ・高品質な製品と安定供給体制

②シリコン

- ・営業・研究・製造部門の「三位一体」体制による、顧客ニーズへのきめ細かな対応
- ・70年にわたり培ってきた高い技術力とノウハウの活用
- ・世界13カ国でのグローバルな生産・販売ネットワーク
- ・生産能力の継続的な増強

③セルロース誘導体

- ・世界トップクラスの生産
- ・医薬用途の為の活発な設備投資
- ・グローバル3拠点での安定供給体制

・加工・商事・技術サービス事業

同社は2つのグループ会社と提携しており、半導体ウエハーケースで世界シェア 1 位を誇る。それら2つのグループ会社と競争優位性は以下の通りである。

①信越プロマー（株）

- ・信越化学グループとして、材料開発から加工まで一貫して行う総合力
- ・各種樹脂の加工をコア技術とし、高付加価値製品を生み出す技術力

②信越エンジニアリング（株）

- ・国内外のプラント設計、建設、保守を自前で手掛ける技術力

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

理解できる部分と、そうでない部分がある。

- ・理解できる部分

①競争力の源泉の持続性

20 ページ目では、同社グループの持続的発展を支える競争力の源泉として6つの項目が挙げられている。以降の説明によると、それらはどれも好調であり持続性があることが読み取れ、競争力の源泉に対する持続性については理解ができる。

- ・理解できない部分

①塩ビ・半導体のシェアを伸ばしていけるのか

同社の競争優位性の1つに、塩ビと半導体における高いシェアがある。8・9ページ目において、それらの需要の推移や市場規模の見通しは示されているが、その中で同社が実際にシェアを伸ばしていけるのかが分からない。

②事業概要はやや不調

43ページ目では、同社の主力4事業における事業概要が示されている。これらを見ると、各事業における今後の成長についてはやや疑問が残る。まず生活環境基盤材料事業においては、主力製品である塩ビにおいて、米国市場における住宅建設の停滞や、中国メーカーによる輸出圧力が続き、か性ソーダにおいても同様に厳しい状況であったと述べられている。次に電子材料事業においては、2022年秋以降の調整局面が続いた一方で底打ちの兆しが表れたとしている。機能材料事業においても、中国経済の不振による在庫調整や市況軟化が強まったと述べられている。これらの状況に対して、確実に生産を伸ばす為に今後どのような措置を講じていく予定なのかが分からない。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

正直、あまり思わない。理由は以下の2つである。

①身につくスキルが専門的である為

1つ目は、この会社で働くことで獲得できるスキルが非常に専門的であり、他の業界や会社への汎用性が低いと思われる為である。例えば23ページ目に掲載されている「コージェネ大賞2023産業用部門 理事長賞を受賞」では、同社で働くシリコン製造部の従業員が、工場のコージェネレーションシステムの建設において「産業部門 理事長賞」を受賞したことが紹介されている。この取り組みは、同社の工場で働く上では役に立つが、システムが異なる他社の工場や化学品メーカー以外の業界においては活かすことが難しい。この為、自身の人的資本の価値向上にはあまり繋がらないと考える。

②女性の活躍度合いが低い為

2つ目は女性の活躍度合いが低い為である。28ページ目では多様な人材の活躍促進として、女性活躍推進をはじめ、多様な人材が能力を発揮して働けるような職場環境づくりに取り組んでいると述べられている。しかし図を見ると、採用時の男女比率は男性が67.9%であるのに対し、女性は32.1%であり、また課長級以上の管理職に占める女性比率においても、2022年度の12.6%から2023年度の12.7%において変化がない。化学品メーカーという特性上、男性の比率が高くなってしまふのはやむを得ないが、女性活躍推進に向けた効果的な取り組みが行われているとはあまり思えない為、女性という立場から見ても自身の人的資本の価値を向上できるとは感じない。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

よかった点

①現場の様子が伝わる「Topic」

随所に「Topic」と称して、同社の実際の取り組みを紹介する記事が掲載されている。今年度は「第1回女性社員ラウンドテーブルを開催」「GaNパワーデバイスの真の社会実装に向けて、QST基盤事業をさらに推進」「地産地消型PPA（群馬モデル）への参加により温室効果ガス排出量を削減」などの記事が紹介されており、同社の具体的な取り組みや現場の様子が伝わり面白い。

②ダイバーシティが伝わる「従業員インタビュー」

27ページ目に記載されている「Shin-Etsu Challenges」という題名の従業員インタビューでは、同社で働く様々な社員が取り上げられてインタビューをされており、ダイバーシティが伝わってきてよいと感じた。具体的には、男性だけではなく、女性や様々な国籍の従業員が働いていることが分かり、世界中のあらゆる拠点で、多くの従業員がそれぞれの形で活躍していることが伝わる記事となっている。

改善余地

①会話ベースのコンテンツに読みやすい工夫を

54ページ目～の特集「三位一体のモノづくり」や、64ページ目～の「社外取締役インタビュー：世界をリードするケミカルカンパニーであり続けるために」など、会話ベースの部分に関しては文字の羅列になっている印象を受ける為、もう少し読みやすくなる工夫を施してもよいのではないかと思った。

②三位一体のモノづくりと価値創造プロセスの関連を示す

16・17ページ目において価値創造プロセスが図式されているが、このうち三位一体となっている営業・開発・製造はぐるぐるとした円の中に示されているだけで、これらが具体的にどのように作用し、価値創出・目指す姿の実現に繋がっているのかが分からない。3者の具体的な相互作用や、それぞれを繋いでいる矢印の上に具体的な役割・影響を示すなどしてそれらの関連の仕方がより伝わるようにすると、より強みが分かりやすいと感じた。